

★ 21回 AGEE

バンク"ヨデシユ
寺小屋 訪問
スタディーツアー
報告書

8.10 ~ 8.24

2001



এই পর্মা এই যেম্মা এই যম্মা সুম্মা নদী তটে
আমার রাশিলা যান গান গোয়ে যায় এজামার দেশ এ জামার
প্রম কত জনম বেদনার মিলন কিয়ৎ সংকটে ॥ এই যম্মা যম্মা
দার তীরে, মিলনকে হারিয়ে বেশাই কিয়ৎ কিয়ৎ। কি মিলনকে
এখান মন্মা এই যেম্মা এই হাজার নদীর অববাকিয়ায়
এই অবারিত সমুজোর খাত হইবে, নদী ও নদীর মত কবীকর
এই নিম্নে মিলনকে মনেছে যম্মে, মিলন মিলনকে
মিলন মিলন মিলন মিলন মিলন মিলন মিলন মিলন
RANGALI SONG
SINCE

第21回 ACEF スタディーツアー参加者名簿(2001夏)

	氏名	備考	教会
	[Aチーム]		
A1	フナトヨシタカ 船戸 良隆	ACEF事務局長	教団教師
A2	チバシンイテ 千葉 信一	山梨英和高校 非常勤講師	甲府教会
A3	カワミマコト 河見 誠	青山女子短大教員	井荻福音キリスト教会
A4	テラモトマサコ 寺本 雅子	聖心女子大初等教育4年	
A5	ニッタサエコ 新田 沙恵子	東京女子大3年	
A6	オオタアツコ 太田 温子	東京女子大社会3年	
A7	カトワシノ 加藤 紫野	東京女子大地域2年	
A8	ヤギサワユ 八木 沙和子	女子美術短大2年	
A9	イシイショウコ 石井 祥子	国立看護大1年	野方町教会
A10	シムラアイコ 志村 愛子	山梨英和高校2年	
A11	カサイフミコ 葛西 芙美子	東奥義塾高校1年	
	[Bチーム]		
B1	イノウエノリコ 井上 儀子	ACEF事務局	浦和東教会
B2	キゴシノリキ 木越 憲輝	聖学院小教諭	新津田沼教会
B3	フジモトヒロシ 藤本 央	東奥義塾高校教諭	
B4	アサイナヨシミツ 朝夷 佳光	高校英語科教諭	代田教会
B5	コバヤシアイ 小林 あい	東京女子大文理4年	
B6	アマガヤカオリ 雨谷 香	東京女子大地域3年	
B7	ワカイサトコ 若井 紗都子	東京女子大地域2年	
B8	ナカイマイ 中井 舞	青山女子短大英米2年	
B9	オガワアヤ 小川 彩	日本女子大社会福祉2年	
B10	シキレナ 志岐 玲奈	山梨英和高校2年	

カメラが戻った

船戸 良隆

今回のスタディーツアーの特徴としては、男性の先生方が多かった事、高校生が3名参加した事などが挙げられるかと思います。AチームもBチームも、チームワークがよくて帰ってきてからの国際協力フェスティバルにほとんどの人が参加してくださったのも、その一つの現れでしょう。

さて、私は今回初めての、非常に印象的な経験をしました。

こんな事はかつてなかった事ですが、ダッカ空港を降りる際、座席上のBOXにカメラを忘れてきてしまったのです。たまたまその飛行機に別の大学生が乗っており、その大学の教師を私が知っていたので、学生に、その教師のゼミかどうかを聞いてみようと思っていたため、すっかりそちらに気を取られてカメラを忘れていました。入国手続きが終わり、荷物が出てくるところにきた時、井上さんから「先生カメラは？」と聞かれ、はっとしました。万事休す。もうだめだと思いましたが、次の瞬間、私は税関をすり抜けて、再び空港内に走っていました。もうだめだ。えらいことになった。そう思いながらも、とにかく、今おりたばかりの飛行機までと思いつつ、ひたすら駆けました。どこへいったら良いのだろう。不安いっぱい、階段を駆け上がろうとしたとき、何と、向こうから私のカメラバックを持った、空港用務員が来るではありませんか。思わず私は、「あつ、私のバック」。と叫びました。その方は、私のボーディングカードとパスポートを確かめて、何事もなかったかのように去って行きました。

私には信じられない思いでした。こんな事がアジアであるだろうか。もしあのカメラを売ったら、安くてもあの用務員さんの1年分くらいの給与にはなつたであろうと思います。

この話を、後でシャプラニールの下澤さんに言ったところ、「そう言うことが、本当に稀にはありますね。というのは、信仰の厚い人で、悪い事はしたくないと思っている人のグループがいるんですよ」とのことでした。

私はBDPのファルークさんに、新聞に投稿してくださいと言ったのですが、どうなったのかはわかりません。もっとお礼を言うべきであったと悔やまれます。

BDPの方々も、そのような人々の集まりです。わたしたちは、稀に見るそのような人々と一緒に仕事をしているのだとの感謝があふれてきました。

アジアキリスト教教育基金

第21回 (2001年夏期) 寺子屋訪問スタディーツアー準備会プログラム

時：2001年7月20日(祝)～21日(土)

所：日本キリスト教会館4F (東京都新宿区西早稲田)

20日(祝)

- 10:15 受付
- 10:30～11:00 開会礼拝(寺島昭二牧師)
- 11:00～11:30 ACEFスタディーツアーの意義について(船戸良隆先生)
- 11:30～12:30 詳しい自己紹介
- 12:30～13:30 昼食
- 13:30～14:00 ACEFとBDPについて(井上儀子)
- 14:00～16:00 バングラデシュについての学習Ⅰ
 概論：高石麻里子さん
 歴史：井上愛也さん
 経済：秋田祐一郎さん
- 16:00～16:15 休憩
- 16:15～17:00 子どもたちとのコミュニケーション(昨年の経験から)
 山口リエさん、徳永由紀子さん
- 17:00～18:00 オリエンテーション(がけ、持ち物など)
- 18:00～19:00 夕食
- 19:00～20:00 チーム別話し合い
- 20:00～20:30 晩祷(河見誠さん)
- 20:30～ 宿舎(戸山サンライズ)に移動

21日(土)

- 7:00～ 起床(箱根山公園に移動)
- 7:30～7:50 早天礼拝(井上儀子)
- 8:10～8:40 朝食
 日本キリスト教会館に移動
- 9:15～11:15 バングラデシュについての学習Ⅱ
 文化：河田真矢さん
 宗教：村上志保さん
 教育：小野道子さん
- 11:15～12:15 やさしいベンガル語、ベンガル語の歌(井上儀子)
- 12:15～13:00 昼食
- 13:00～13:30 質疑応答
- 13:30～14:00 閉会礼拝(船戸先生)
- 14:00 解散

第21回 (2001夏) スタディーツアー日程

- 8月 10日 (金) 成田発 (ビーマン航空) ダッカ着
11日 (土) 開会礼拝 (千葉先生)
BDPについて講義 (アルバートさん)
ニューマーケットに買い物
12日 (日) ダッカスラム地区寺子屋学校訪問
(モニプールスクール/ラルクティスクール)
カトリック教会礼拝出席
13日 (月) 農村に移動
Aチーム
カティラ地区 (ボリシャール県) へ
Bチーム
ゴパールプール地区 (ジャマルプール県) へ
↓
↓
↓
20日 (月) 農村よりダッカに戻る
21日 (火) プーバイル (ガジプール県) に出発
職業訓練学校、寺子屋学校を訪問
(シヨモシンスクール/ナラヤンクールスクール)
22日 (水) 博物館訪問
BDPカルチャーショー
23日 (木) 最後の話し合い (BDPスタッフと共に)
閉会礼拝 (船戸先生)
ダッカ発 (ビーマン航空)
24日 (金) 成田着

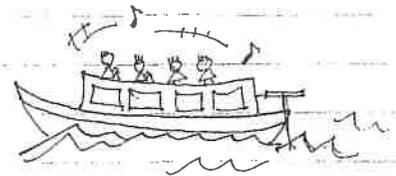


イラスト
あっこ★

- ① 初めてBDPの経営する学校（寺子屋）訪問を許されたこと、そこで多くを学ぶことが出来たことを、神様とBDPのスタッフの方々、そしてACEF事務局のお二人の先生方に対して深く感謝を覚えます
- ② そこで学んだこと、認識を深めたことは
 - a. どの学校の児童生徒も目を輝かし、熱心に学んでいる姿に深く感動しました。
 - b. そこで教える教師、とりわけ女性教師に、自信と誇りと熱意を強く感じました。
 - c. 学ぶ児童生徒たちが狭い教室にぎっしり詰まっていて、寺子屋の *capacity* が大変不足している状況を認識しました。
 - d. BDPスタッフらの明るさ、団結の強さ、お互いの信頼感、そして彼等の「寺子屋教育」に対する献身的努力に感動しました。
- ③ プログラムの中で感謝したいこと
 - a. 毎日、礼拝（朝祷）で始まり礼拝（晩祷）で終る一日であった。
 - b. 参加者全員が聖書を読み、聖書を学び、聖書で考えたこと。
 - c. ツアーの統率を乱した人が一人もいなかったこと。
- ④ 今後大切にしたいこと
 - a. ツアー参加者一人一人の新しい出会いと友情を、今後も長く続けたい。
 - b. ACEFとBDPの活動を忘れず、可能の範囲で今後も参加していきたい。
 - c. 私たちの周囲に、バングラデシュで学んだこと、見聞したことを伝えていきたい。
- ⑤ ご寛恕いただきたいこと
 - ① BDPスタッフの方々が真心こめて作ってくれた食事をまったく食べられなかったこと。
 - ② 参加者のみなさんが持参した日本食をたくさん頂戴し、わがまをさせていただいたこと。

「出会い」という観点から、スタディーツアーで教えられたことをまとめてみる。

<物乞い少年との出会い>

空港から出た途端、駐車場の柵に群がっている物乞い少年たちに出会う。バスに向かって手を差し伸べる子どもが印象的であった。BDP代表のアルバート氏は、この少年たちも家族を支える立派な仕事をしていると考えるべきだが、しかし、彼らに「子どもらしい」日々と、将来の可能性を開く選択肢を提供したいのだ、と熱く語っていた。「かわいそう」の一言で片づけず、子ども一人一人の誇りと自律と自由な選択を彼らへの関わりを基盤にするBDPの姿勢に、深い感銘を受けた。

<寺子屋での子どもと先生との出会い>

ダッカのミルプールの5年生のクラスには、毎日何時間か働きながら学校に通っている男の子が二人いた。一人は11歳、もう一人は14歳である。農村のカティラでは、お母さんが働きに出ているのでジュートの葉を炒めて食事を作っている女の子を見た。貧しさの中にある家庭では皆が助け合って生活を支えているのだが、子どもたちは驚くほど生き生きとしていた。教室の中での熱心さ、宿舎に遊びに来る子どもたちの興味津々のまなざし、人なつっこさと同時に「子どもらしさ」を思い出させてくれた。日本の子どもたち（大人も）が急速に失いつつある「子どもらしさ」を思い出させてくれた。

カティラでは地域全体の先生方との対話集会がもたれた。特に印象に残ったことは、教師としての喜びがどこにあるか、といった質問に対し、自分が担っている教育がこの社会にとって極めて重要であること、という意見が出ていたことである。現在の日本での若者の職業選択の理由としては、例えば「子どもが好きだから」といった情緒的理由、また「自己実現」という個人的理由が中心となっているように思われるが、バングラデシュの女性の先生たちは「社会的必要」に関わっていることに喜びを見いだしているのである。ここに、授業をしている先生たちから感じられた、誇りと自信の源泉があるように思われた。

<BDPスタッフとの出会い>

スタッフはとにかく親切であたたかく、なにより底抜けに明るい。移動の途中の船で水の掛け合いをしたり飛び込んだり、事あるごとに歌と踊りを楽しんだり、笑いが絶えなかった。この明るさは、私達を楽しませようとするホスピタリティもあるだろう、南国バングラデシュの人々の性格なのである。

カティラのスタッフ一人一人について楽しい思い出があるが、特にダニエルさんと手をつなぎながら、喫茶店（といってもトタンでできた小屋の一角）に行き、ウイスキーのストレートを飲むようなグラスで2杯、あまーいチャを飲んだことは忘れられない。彼は「お前とお前の家族のために毎日祈る」とじっと目を見つめて言ってくれた。ポリシャルで帰りのダッカ行きバスを待っているとき、何か思い出に残るものを渡そうと思い、かぶっていた帽子を渡すと、「この帽子をかぶって毎日仕事をする」と言っていた。彼は本当に毎日祈り、毎日帽子をかぶるであろう。その純粋さに、本当に脱帽であり、感動を覚えた。

カティラに付き添ってくれたファルク、ステファン両氏ともいろんな話ができた。この友情関係は一生の財産になる予感がする。

<スタディーツアーメンバーとの出会い>

参加者との出会いも貴重であった。千葉先生はお若い。食事の問題を抱えながらもすべてのプログラムと一緒にこなした身体的若さと同時に、シェアリングの時の意見の柔軟さと鋭さには感銘を受けた。先生のように、自分の生き様を通して本物の生き方を語る人生を送りたいと思った。船戸師にも同様の感銘を受けた。ファルクさんは、もし自分に政治的力があることとすれば、まず第一にしたいことは船戸師にバングラデシュの名誉市民の称号を与えることだ、と力説していた。師の働きが本物である証である。その働きを共に担っている井上さんの働きも同様である。

参加した学生の皆さんにも感銘を受けた。今の若者の長所である「素直さ」とともに、問題を問題としてしっかり受け止める「正しい感覚」を持っていると感じた。素直さをもって正しく鋭い感覚を持つて受け止めた問題を、自分の言葉で「言語化」できる力も備えている。将来が楽しみである。

学生の皆さんへのお願いが一つ。もしできるならば、将来誰かBDPの活動を研究してレポートして欲しい。その時には是非、論文のコピーを一部譲っていただきたい。楽しみにして待っています。

※蛇足：船戸師とともに、床屋も経験してきた。技術は確かであるが、首に巻くエプロンだけは、使い回しせず、せめて何回かに一度は洗濯して欲しい。あの何十分分の体臭の混ざった臭い、これもまた一生忘れることのない思い出、思い出香となろう。

あお ~カティラの1週間~

8月13日(月) ☁

いざカティラへ!

早起した私たちは(バスとフェリーの旅に出た。時速100km(!)はでているであろうバスに、千葉先生はヒヤヒヤのご様子。バスを降りてからも、橋が揺れてたり...

約9時間の道のり、
ともかくも、みんな無事に着けてヨカッタ。

with 船戸先生 千葉先生
河見先生、マサコ サエユ
アツコ しの サワコ
しよこ、アイコ フミコ

8月16日(木) ☀

この日の学校訪問は船で行きました。帰りのにわか雨のときには快く雨やどりをさせてくれた方。いつも人々のホスピタリティには感動します。そして... 帰りの船の上はお祭り騒ぎ。

夕方は Culture Show ★
女の子はみんなサリーを着せてもらっておめかし。おてにはミンディーです。屋上での Show はカワイイ子と美しい踊りにみんなくぎづけ。

8月14日(火) ☁

朝からラジオ体操のテープは聞けなくなりました。

この日は2つのグループに分かれて学校訪問。よく歩いたなあ~
それぞれココナツジュースをごちそうになったり、子どもたちと遊びました。

午後は子どもと遊ぶ人あり、池で泳ぐ人あり、寝る人あり、思い思いに過ごしました。

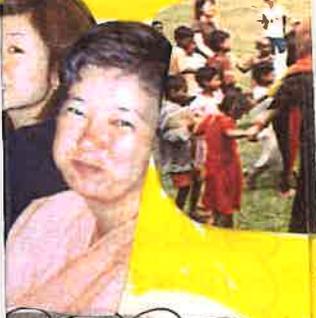
8月15日(水) ☁ / ☀

<national holiday>

今回のお休みは特別で、カティラ school に近くの(といってもかなり遠い) BDP school の先生達が大集合! 総勢60人くらいだろうか。先生達との交流では、ベンガル語の "I Love You" を教えてもらいました。

ヒンドゥー寺院ではステキな声とハートにうっとり♡

この日のシェアリングは、結婚観について盛り上がりましたね。



まり。

8月18日(土) ☀

ついにカエルが食卓にのぼる。
でも、けっこういけるかも。

早いもので、この日がカティラ地区では
最後の学校訪問となりました。

夕方にはビノイさんちへ家庭訪問。
うす暗くなるまでバトミント大会。
シャゴルさんも、バーナードさんも、ジョセフ
さんも手加減してくれたのでしょ。

よるの献立 (和)

- 胡瓜と茄子の塩もみ
- 鳥の唐揚
- じゃがバター
- 卵焼
- フライド・オニオン
- リンゴ

フの人たちと仲よく言合せる
りお別れはつらい。
な「カティラに帰りたい。」と切に
ない人々(名。)



太田 温子

☆☆Starfish☆☆

日本に帰ってからもずっと私の心にひっかかっているのは、最後のラップアップ・ディスカッションでアルパートさんが話してくれたこと。海岸にうちあげられたたくさんのヒトデ、それを1つずつ海にかえす人。「そんなことをしてなんになる」と言われても、ヒトデを海にかえす人。海に戻れたヒトデは喜んでいいるから。私はそのときやっと、BDPの活動のすごさに気づいた思いだった。そして私は2週間、何を見てきたのだろうと、恥ずかしくなってしまった。

子どもたちの笑顔がそこにはあって、笑顔を増やしていく仕事はとてもすてきだ。自分自身、何かに一生懸命になれることが少ない気がしていたから、あの大きくてキラキラ輝く目は忘れられない。

優しい人たちやどこか懐かしいカティラの自然に包まれていたとき、素直な自分がいた。今思い出していると、ふんわりと優しい気持ちになる。

私は日本に戻り、水も電気も使い放題。バングラデシュでは今日も都市の雑踏の中で、農村の自然の中で人々が生活していると思うと、なんだか不思議な気分だ。子どもたちは学校に行っているかな？バスもぶっとばしているのかな？遠いけれど、ふとした瞬間に思い出して、近くに感じる今日この頃。

まずは、思い出で終わらせないこと、忘れないことが大切なのかな、と。

優しさも感謝も、生きることの厳しさも、

まだ気づいていないくらいたくさんのことを学んだ気がする。

今はすべての人、出会いにありがとうと言いたい。

「バングラデシュに何をしに行くの?」「ボランティア?」と、友達や周りの人からよく質問された。確かにバングラデシュは経済的に貧しい国であり、私も ACEF という NGO を通じてこの国へ行くことに決めた。しかし私にとっての目的は、その国の人々の貧困を知り、彼らのために何か自分にできることを求めたのではなかった。あくまでも“自分のために”行ったのだ。私は大学生になり自分のことを自分で決めて行動し考えることが多くなった今、悩みもまた増えてきた。特に、「将来の夢は?」とか、「趣味は?」と聞かれることがとても嫌なことだった。それは、就きたい仕事や、特別な skill を持っているわけでもない将来に対する漠然とした不安。また、自分が好きで必死で打ち込めることも特にない虚しさ。大学での勉強が自分にとっての何なのか。COMPUTER や携帯、さまざまな情報などに取り残されてはいけないという恐怖感念……。挙げたらきりが無いのだが、そんな時考えたことはこのようなことであった。それは、(それぞれの人に様々な悩みや心配がある。では、それを生み出す“環境”とは一体何だろう。)ということだ。自分の場合だと日本—東京—大学—家族—友達...という中で価値観、常識、悩みがある。ならば今いる環境となるべく違うところへ行き、実際にその社会や人を見れば、視野が広がり、自分を客観的に見るようになれるのではないか。そんな時に出会ったのがこの国、バングラデシュであった。首都のダッカでは、車やリキシャの勢い、人の声、ベルやクラクションの音や排気ガスの匂い、物乞いの人が自分に迫ってくる緊張感などを五感すべてで感じ、また農村のカティラではゆっくりとした時の流れを感じながら、ヒンズー寺院での祈りの歌や熱い信仰心、愛国心を知った。そしてリキシャをこぐ人の背中や細い足の筋肉の動きや汗もまた印象的だった。そして、寺子屋での生徒と先生達の声。ダッカとカティラはまるで別世界であり、この国を一言で語ることはできないと思う。ただ、共通して言えること、それはこの国から人々の力強さが直に伝わってきたことだ。その力強さは彼らが“生きるために生活をしている”ことから生まれるのだと思う。糧を得るために物乞いをしたり、生きるために働く人々。食べ、働き、眠るという人間の最も基本的な行動を見た。日本に比べると、彼らの生活は原始的であり、余分な事が少ない。余分なこととは、日本でいう対人関係によるストレス、ダイエット、遊ぶために造られた娯楽といったものである。また自分の事で言えば趣味を見つけることや選択肢が多いゆえに将来の職業について悩むといったことだ。そんなことを思うと、彼らの生活が自然で羨ましく思った。しかし、BDP の先生方(ほぼ全員女性の方であったのだが)への質問で「教師以外になろうとしたことは?」という質問に対して現在彼女達にとっては教師になる以外はみな専業主婦であるという事実を直接聞いて私はハッとした。まぎれもなくここは開かれていない社会なのだと思う。この考え方をそのまま押し付けてはいけないと思うが、私から見ればそれは可能性という言葉は当てはまらない社会であり、私はここで生きることはできないとふと思った。今回はほんの一部であるがバングラデシュを知り、日本と比較することで、自分の置かれている環境が見えてきた。そして、それぞれの環境でそれぞれの生き方があると認識した。

バングラディッシュ体験レポート

八木 沙和子

このスタディーツアーを通して、たくさんの事を学ぶことができました。その中で、特に感謝の心を、日々忘れずに生きていこうと思いました。人に、豊かさに、そして自然への感謝。日本人として、ものの豊かな国に生まれた私は、とても幸せな環境に生きてきたということに気付かずにいました。再び日本に帰ってきて、生活の快適さに驚き、初めて自分の幸せな環境に気付きました。

同時に、人間誰一人として同じ人はいない、だから自分にしか出来ないことがある、ということについて、自分の役割、それは誰もが持っているのに私はまだ分からずにいました。スタディーツアーに参加して、少し自分の役割というものが分かってきました。その事を。まだ決まっていない自分の職業につなげていきたいと思えます。

また、現地では、ただの観光ではなく、普通行けないような農村地で、人々の生活を間近に見ることが出来たのは、とても良かったと思います。自分自身、バングラディッシュで2週間過している間は、だんだん向こうの生活になれた気でいましたが、実際には「客」であって、本当の生活の厳しさというものは、想像以上のものであると思います。

それを、生まれながらに背負っているバングラディッシュの人々の生き方は、原始的で、たくましく。人間は自然があるからこそ生きることが出来、自然と人間はうまく共存しなければいけないのだ、と感じました。

寺子屋訪問や、カティラの先生方との対談を通して、バングラディッシュの教育制度の現状を肌で感じる事が出来、BDPとACEFの活動の必要さがとても大きいと分かりました。そして、教育を広めることの重要性、大変さを感じる事ができました。

この貴重な体験を、ぜひ多くの人に伝えたいと思えます。

バングラデシュでの学びの2週間

石井 祥子

バングラデシュでの2週間、私にとっては本当に学びの時だった。車やリキシャと人でごった返すダッカ、道やマーケットで物乞いをする子供たちや母親。美しい自然の広がるカティラ、強く素直な信仰心を持ち1日1日を生きる人々。仕事に誇りを持って子供たちに教えている先生方、勉強を一生懸命にして歌う時や遊ぶ時は目を輝かす子供たち、働きながら学校に通う少年。BDPのスタッフの方々との話、スタディ・ツアーのメンバーとの礼拝やシェアリング……。もともと色々なことがあった。将来発展途上国で働きたい、その為にも実際にそういった国を自分の目で見てみたいと思って参加したこのスタディ・ツアー。目で見ただけでなく、バングラデシュの空気を肌で感じ、生活の一部を体験し、多くの人と（バングラデシュの人ともツアーのメンバーとも）ふれあい話すこと、全てが勉強でそこから学ぶことは多かった。

今一番感じていることは、私は本当に恵まれた環境にいるということだ。恵まれた環境とは物質的に恵まれているということではない。確かに日本はバングラデシュに比べて物質的に豊かなところがある。しかし、私が恵まれていると感じるのは、自分のやりたい勉強ができるということだ。小学校も中学校も高校も出て、自分の将来の為に2年間勉強した上に大学での勉強ができている。スタディ・ツアーに参加してバングラデシュへ行くこともできた。今までは、勉強の機会を与えられて恵まれていると考えたことは少なかった。勉強できることを当たり前のように思っていた。しかし、学校を訪問し子供たちや先生方と出会い、勉強できることが幸せなことかもしれないと思うようになってきた。将来つきたい職業があっても勉強できない人もいる。私は看護婦になる為の勉強ができる。本当に感謝したいと思う。そして、今まで以上に勉強に励みたいという気持ちになった。

これから私はどのように生きていくか。今はまだはっきりとは分からないが、スタディ・ツアーで感じたこと、学んだことはいつも心に置いておきたい。そして、それを活かせる時が来たら十分に活かしたい。その為にもまずは毎日感謝して精一杯生きてみようと思う。

今年の夏休みは私にとって発見の連続でした。バングラデシュという国は今まであまり耳にしたことがなく、どのような国か想像できませんでした。多くの不安が募りましたが、寺子屋を見てみたい、アジアに行ってみみたい、途上国の様子を実際に見てみたいという思いで参加しました。

ダッカの空港に着いて、蒸し暑い気候や多くの人だかりに少し戸惑いを感じました。しかし初めて見る光景に興味を持つ私達と、物珍しい目で外国人である私達を見つめるバングラの人々…どちらも興味津々でした。

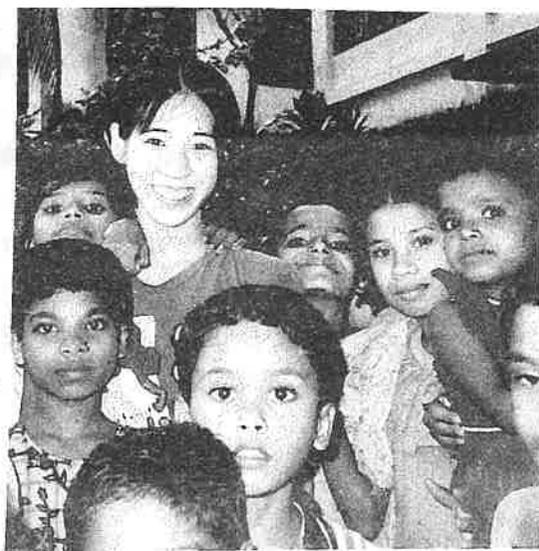
ダッカは交通量がとても多くて驚きましたが、皆“モンダイナイ”という顔で運転していました。宿舎では初めて体験する蚊帳付きベットに心が躍りましたが、実際は風があまりなくて暑い思いをしました。右手は食事、左手はトイレというベンガリースタイルもあまり慣れませんでした。手で直接食事をする事によって何か食べ物との密接な関係が感じられました。

農村・カティラ地区では一変して緑の広がる自然に囲まれました。やしの木が列をなし、マンゴーやバナナ・パパイヤの木があちこちに成育しており、河にはジュートが生い茂っていました。鶏やヤギ、牛、犬、アヒルが道端にいてとてもどかな雰囲気でした。宿舎の前には池があり、そこで“モンダイ”なく食器を洗ったり、体を洗ったり、泳いだり、裁いた鶏を洗ったり、魚を釣ったりしていました。外には井戸があり、私達はそこで洗濯や髪を洗いました。私が頭を洗っている時、子供達が寄ってきたので少し恥ずかしかったけれど子どもがポンプを押してくれた井戸水で頭を洗えてとても気持ち良かったです。天気の良い夜には日本では見られない満天の星空が見え、それらが池にくっきりと映っていました。流れ星と思いきや、ホタルも飛んでいてとても幻想的でした。

BDPの方は皆とても優しく楽しい人ばかりでした。食事の時や移動時間の時はいつも楽しいひとときを過ごせました。夜、屋上で歌合戦をしたことも忘れられません。ベンガル人は誰でも、歌や踊りがとても上手で私はいつも惚れ惚れしながら見ていました。自分ももっと日本的なものを1つくらい身に付けておこう、と思いました。

また私は学校を7校訪問しましたが、暑く薄暗い教室でも元気いっぱい授業を受けている子ども達に圧倒されました。高学年になると家の手伝いで通えなくなる子が多くいる事を聞き悲しくなりましたが、それだけに授業に対する本来の意味を教えてくださいました。私は子ども達が子どもらしい生活を送れるようなよき隣人になりたいと思いました。

もう一度バングラの地を踏みたいのです。



人の優しさに触れて...

☆メンバーの優しさ 葛西 芙美子(Shewly)

私は、このスタディーツアーを通してこんなにも一緒に参加したメンバーと仲良くなれるとは思っていませんでした。正直言うと研修会の時、大学生という事で「どんな風に接すれば良いんだろう」と悩んでいました。しかし実際バングラに来て、話をするのはもちろん、ゲームをしたり楽しんだり、STAFFの方と恋愛話をする時は、いつも大学生ばかりなので、自然と仲良くなっていきました。特にカティラチームの、方々にはたくさん迷惑をかけたりしましたが、皆優しく接してくれました。

- ★一番年が近くてしっかりしている大きい魚を釣った愛子さん。
- ☆どんな小さい事でも心配してくれたさすが看護婦、祥子さん。
- ★第一印象は少し恐かったけど、実は凄く良い人でたくさん一緒に泳いださわこ。

☆SUTORONGGARLと思われてたが、実はか弱く涙もろいシノ。

- ★のほほんして話やすいオーラを出してたお姉ちゃんにしたいあっちゃん。

☆おっとりして、いつ倒れるか心配だったが平気だった、時々爆弾発言をするさえこサン。

- ★はじめが凄くついていて、一番頼っていたと思われる、そしてその場のムードの盛り上げ方が上手いまさこ。

☆いろんな事を知ってて、私の中では「物知り博士」の河見さん。

- ★いろんな事を経験している、人生の大大先輩である千葉先生。

☆そして何より、どんな時でも笑顔が素敵だった船戸先生。

私は、このメンバーであったからこそたくさんの事を学べて、かなり思い出に残る「初」海外旅行が出来たと思います。本当に充実した二週間を過ごす事が出来ました。ありがとうございました。

ボロボロボロ ドンノバット

あお ~カティラの1週間~

8月13日(月) ☁

いざカティラへ!
早起した私たちは(バスとファミリーの
旅に出た。時速100km(!)は
でているであろうバスに、千葉先生は
ヒヤヒヤのゴ様子。バスを
降りてからも、橋が落ちてたり...

約9時間の道のり、
ともかくも、みんな無事に着けて
ヨカッタ。

8月14日(火) ☁

朝からラジオ体操のテープは
聞けなくなりました。

この日は2つのグループに分かれて
学校訪問。よく歩いたなあ~
それぞれココナツジュースをごちそうに
なったり、子どもたちと遊びました。

午後は子どもと遊ぶ人あり、
池で泳ぐ人あり、寝る人あり、
思い思いに過ごしました。

with 船戸先生 千葉先生
河見先生、マサコ サエコ
アツコ しの サワコ
しよこ、アイコ フミコ

8月16日(木) ☀

この日の学校訪問は船で行き
ました。帰りのにわか雨のときには
快く雨やどりをさせてくれた方。いつも
人々のホスピタリティには感動します。
そして... 帰りの船の上はお祭り騒ぎ。

夕方は Culture Show ★
女の子はみんなサリーを着せてもらって
おめかし。おてにはミンディーです。
屋上での Show はカワイイ子と
美しい踊りにみんなくぎづけ。

8月15日(水) ☁ / ☀
< national holiday >

今回のお休みは特別で、
カティラ school に近くの(といっても
かなり遠い) BDP school の先生達が
大集合! 総勢60人くらいだろうか。
先生達との交流では、ベンガル語の "I Love
You" を教えてもらいました。

ヒンドゥー寺院ではステキな声とハートにうっとり♡
この日のシェアリングは、結婚観について盛り上がりましたね。

8月17日(金) ☀

本日の学校訪問は、みんなで
バンに乗り、ゴトゴト行くこと10kmあまり。

別名“ダニエル・ビレッジ”。

教室で日本の歌をうたったり、子ども
の踊りを見た後に、ダニエル邸拝見。

信仰の厚さにも触れました。

午後はそれぞれ、ビートルさんや
ピーターさんによるベネガル語の
歌々講座や水あそび。

8月18日(土) ☀

ついにカエルが食卓にのぼる。
でも、けっこういけるかも。

早いもので、この日がカティラ地区では
最後の学校訪問となりました。

夕方にはビノイさんちへ家庭訪問。
うす暗くなるまでバトミント大会。
ジャゴールさんも、バーナードさんもジョセフ
さんも手加減してくれたのでしょ。

8月19日(日) ☀☁

朝はカティラ・バプテスト・チャーチ
の礼拝に参加して、日本の讃美歌を
うたいました。

夕食の買出し班以外は子どもと
遊んだり、魚釣りを。そして私たちは
はきたニワトリから唐揚げをつくり、
夕食はちょっと懐かしい日本食が
汗かいて作ったぶん、おいしかった♡

よるの献立 (和)

- ・胡瓜と茄子の塩もみ
- ・鳥の唐揚げ
- ・じゃがバター
- ・卵焼
- ・フライド・オニオン
- ・りんご🍏

8月20日(火) ☀☁☁

ダッカに戻る日。やっぱりとスタッフの人たちと仲よく言合せる
ようになったというのに…。やっぱりお別れはつらい。

“come again!”と言ってくれた。みんな「カティラに帰りたい。」とセカに
思いました。(ダッカに戻っても元気のない人数名。)

Jamalpur



Kathhila



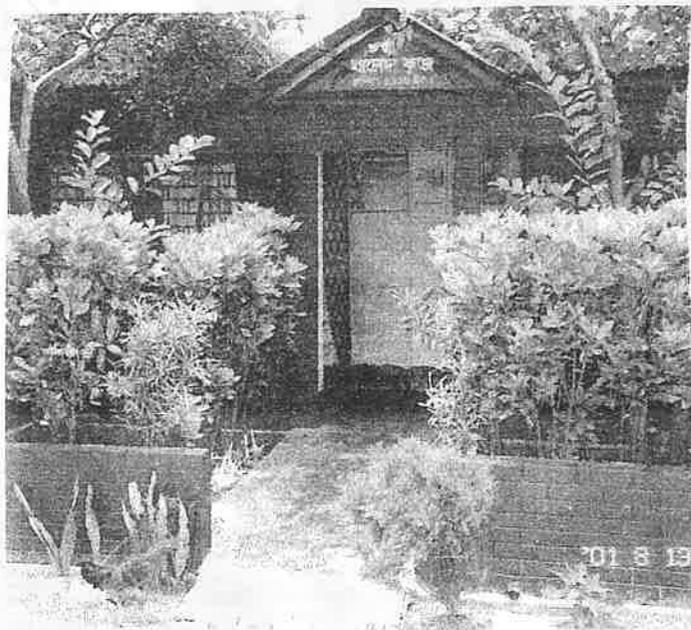
JAMALPUR

8月13日 月曜日

とうとうそれぞれのチームに分かれての活動。せ、かく仲良くなれたみんなとしはしのお別れ。ダッカを抜けてジャマルプールへ。貧困と発展の間で揺れ動いているように見えたダッカを離れると広がる大自然に胸が高鳴る。スタッフや村の人々に暖かく迎えられ JAMALPUR に来たことと本当に嬉しく思う。
子供たちと手を繋いで全力疾走!!!



8月14日 火曜日



昨夜の大雨とはうってかわって朝から快晴☀️
初めでカ車に乗って学校訪問に行きた。どこの行っても歓迎される。
夜はよさんの誕生会! みんなで歌って踊って楽しいひとときです。みんな熱い!!! 熱すぎる!!!
JAMALPUR にきて、多くの人と出会うことができてよかった。

ボイタマリー スクール
ジョカ スクール へ

どんなに小さなことでも忘れずにいられたような記憶の力があればいいのに。

8月15日水曜日

モグレスさんの彼女(奥さん?!)の家に行った。奥さんの義姉さんは結婚して4日の新婚さんだ"というのに、だんな様の顔を見たことすらないのだ"そう。そして、モグレスさんの家へ。みんな優しい人たちだった。

午後にはサリーを着せてもらった。シント"カール!!!



8月16日木曜日

カ車に1時間ほど乗り、トクジョリスクールとバスチオラススクールへ。昨日練習した"ママルバ"と"It's a small world"を披露。

日本にいるときに小出た"り、苦しんだ"ことか"とでも小"マ"ンとに思いました。みんなで"かわいいものを"かわいい"と"かんじ、暑い暑いと"ブ"ブ"言"言"、GAPにてきぬ(BY 楽の友だち)笑って、泣いて楽しい時間と"可"す。

We are Strongest !!!

8月17日金曜日

本日は祝日。午前中にホ"ットトリップ。河原で走り幅跳、高跳び、かけこ"を"して楽しんだ。"。帰りのホ"ット"ではバ"ット"さん、ハ"ビ"グ"さんか"ホ"ット"から落とされた。モグレスさんはサトコの膝にしが"み"ついていたので"無事"でした。サトコは"大"変"た"ら"た"いと"。"

午後は子供笑と"体"を"は"、"遊"んだ"。"

8月18日 土曜日

バスボルトに乗れるのかと、かすかな期待を胸にボイタリスクールへ。河の水が思いのほか少なくて、みんな歩いて河を渡り向う岸に。スタッフやカ車のおじさん(お兄さんも1人だけいたな)に助けられよから!

夜、停電に! 停電になつてくれたおかげでフネタリウムのような星空を見ることができた。あんな星空、今まで見たことがなかった。星の光に負けずに螢も光っていた。

8月19日 日曜日

午前中に学校訪問。午後は教会へ。この日の夜御飯はとにかくすげかった! 前日にリクエストしたものをすべてかきたのだから。彩ものりこさんもうしゃく食べ放題! ショックフルーツもグリーンリもなんでもあり!

食事の後、スタッフとのシェアリング。よかよかの寝つけず、外のベンチに座り、それぞれのおいしさに3人いた。

のりこ先生、彩、あい、ショアークさんは夜更かし組。

なぜ、楽しい時間ははやくあつてしまふのにならう。



LAST DAY
8月20日 月曜日

出会いは「あなは」必ず「別れ」がくる。ジャマルプール
で私たちが「得た」ものは「かけがえ」がなく、これから
人生の「指針」になろう。いこう。

BANGLADESH
JAPAN
FRIENDSHIP

LIVE LONG ———



分かち合いの方法

井上儀子

「もし私が5つのパンを持っていて、その内の4つを食べておなかがいっぱいになり、残った1つのパンをあなたにあげます。というのと、1つのパンをあなたと半分ずつ食べましょう、と半分のパンをあなたにあげるのとでは、どちらが嬉しいですか？」

今回、この質問をいろいろな方に尋ねてみました。というのは、わたしはすぐに半分のほうが嬉しいに決まっていると思ったのですが、もし、とっておなかがすいていたら、とってお困っていたら、半分と1つとでは果たしてどちらがいいのだろうかと考えてしまったのです。日本人の子どもたちにも聞きました。一緒に行った日本人のメンバーにも聞きました。半分の方が嬉しいと答えた人も、半分と1つよ！と念を押すと、みな迷って考え込んでしまいました。

ところが、バングラデシュでこの質問をして答えるのに迷った人は一人もいませんでした。みな即、半分の方が嬉しいと答え、とっておなかがすいていても？ 半分と1つよ！ と、問い詰めても、半分のほうが嬉しいに決まっているさ、と明快な返事が戻ってきました。「二人の人がいて、自分だけが食べるなんて考えられない。」と言って、二人連れが森の中で熊に出会った有名な例え話（ただ、彼の話ではベンガル人らしく熊がトラになっていました。）を説明してくださった人もいました。いつもおなかをすかして、私たちの台所を覗きに来る隣の家の大家さんも、「いくらおなかがすいていても、半分のパンと水があれば十分。私たちは二人なんだから半分ずつがいいよ。」とウィンクされてしまいました。BDPのスタッフも、学校の先生も、料理を作ってくださいるおばさんも、村の子どもたちもみんな「半分のほうがいい。」と口をそろえて答えました。小さな小学生の子どもにまで「半分もらって私は嬉しいし、あなたも嬉しいでしょ？ あなたも嬉しいし、私も嬉しいのよ。」とにこにこして言われ、私は自分の質問に恥かしくなっていました。

ここに、分かち合いの本質があると思います。たくさんものの中からほんの一握りを与えて何かいいことをしたかのように錯覚することがありますが、分かち合うということは、自分の分は確保しておいて、余ったもの、残ったものを与えることではないのです。私のすぐ隣に困っている人がいることを覚えて、自分の持っているものを分かち合っていく心もちたい。そしてこの分かち合いの生き方に徹したいと強く思いました。

Bangladesh で出会ったものにドンノバット



Bangladesh の子どもたち

子どもたちが授業中に見せた目の輝きや真剣な眼差しが忘れられません。葉っぱを風車にしたり、グアバをそのままかじったり、池で思いっきり泳いでいたり、握手を求めたり、みんないい顔をしていました。「生活は貧しいが心は貧しくない」ショフイクさんの言葉は忘れられません。

物だけで貧しさを図ることはできないのではないかと強く考えさせられました。

BDPスタッフ、そしてバングラの自然

BDPのスタッフの皆さんは、学校の案内だけでなく、歌を歌ってくれたり、食べ方を教えてくれたり、家族を紹介してくれたり、本当に心からのもてなしをしてくれました。

おかげで、バングラの歌が好きになったし、バングラの食事がおいしいと思えたり、バングラの生活が本当に楽しいことづくめでした。

住めば大変だと思いますが、ツアーリストとしては、ジャマルプールもプーバイルも美しい自然のいっぱいの素敵な場所でした。



21回スタディーツアー参加のみんな

一緒に食事をしたり、聖書を通して感想を述べ合ったり、一緒に歌ったり、共に劇を作演したり、アイセセラアイメセラを歌ったり、共感できた2週間でした。

日本人だった私たちが、バングラで共に生活できたことは、心強かったです。バングラデシュが好きになった要因は、ツアー参加者のおかげだったといっても過言ではないと思います。だから、みんなに感謝します。

バングラの子どもたち、BDPのスタッフのみなさん、スタディーツアーの参加者の方々、本当にありがとうございました。

I LOVE BANGLADESH!

2001.9
23

木越 憲輝

私は、ずっと“アジア”に興味があった。一種の憧れのような気持ちを持っていた。生活も文化も生まれも違うが、アジアの人たちには同じ匂いを感じた。どうしてあんなに明るいのか、どうしてあんなに輝いた眼をしているのか。彼らには魅力があった。どうしてなのかわかりたいと思った。そして、バングラデシュに行くことが叶った。

子供たちの笑顔は、人の心を動かす力を持っていた。ぱちっとした眼、真っ白い歯がこぼれると思わず嬉しくなってしまう。言葉なんか分からないがなんとなくなってしまう。きれいな花を摘んできてくれたり、風車を作ってくれたり、擦り傷だらけになるまで遊んだり、いつも友達として迎えてくれた。

そして、スタッフの心遣いが嬉しかった。毎日美味しい食事をごちそうしてもらったり、バナナボートと一緒に歌い、川岸を走ったり、満天の星空を眺めたり、心の底からはしゃいだ。みんなで披露した“ママルバリ”、“アカシエル ロンゲルモト ピーズ”。子供たちや村の人たちの拍手が嬉しかった。一体感、達成感は爽快だった。

今回、数多くの学校を訪問して感じたことは、先生も子供たちも真っ直ぐに向き合っていることだ。子供たちの眼はつねに先生に注がれていて、先生の眼は自信に満ちて、教室に一体感が生まれている。BDPのスタッフも誇りを持って教育と向き合っている。真摯に子供たちのことを考えている。どんな時でも子供たちのことを忘れてはいけない、そう思った。ここには学校の原点があると思った。

バングラデシュの人は子供たちも大人もみんな歌が好きだ。自分たちが戦って手に入れた国に誇りを持っている。そして、宗教という強い心の支えを持って生きている。“大切なことは、モノがなくても心が豊かであることだ”と改めて感じた。

それから、もう一つ強く心に残っていることがある。それは物乞いをしていた小さな子供たちや子供を抱いた母親のこと。何もしてあげられない自分自身に歯がゆさと罪悪感がつきまとう。何度「ダメだよ」と言っても、無視をしても、あきらめてくれなかった。どうすればよかったのか、今でも分からない。だが、このことはこの先もずっと忘れることはないと思う。何かが胸の辺りに引っかかったままだ。

私は、この旅で出会った人たちにたくさんの大切なものを与えてもらった。見失っていたもの、忘れていたものを思い出させてもらった。まだ、与えてもらったものは、はっきりと自分の言葉にはできない。しかし、この体験は忘れられない大切なものになった。素晴らしい友人たちと出会えたことが本当に嬉しかった。バングラデシュでの十数日間は、とても幸せな時間だった。

本当は、もっと前にバングラデシュに行きたいと思っていた。年齢を重ねれば重ねるほど新鮮にもものごとを受け止めることができなくなる、と考えていたからだ。しかし、それは大した問題ではなかった。私はこの旅に参加できて本当に運がよかった、と思う。もし少しでも機会がずれていれば、今回出会うことができた人たちとは出会えていなかったのだから。この出会いを与えて下さった船戸先生、井上先生、BDPスタッフ、そしてツアーメンバーの皆さんに心から感謝します。最後に、Bチームのみんな本当にありがとう。そして、これからもよろしくお願いします。

このツアーに参加して本当に多くのものを得ることができました。今まで、第三世界に関して間接的にいろいろ情報が入ってきたものが、直接的に体験することができました。バングラデシュという国は世界的に最貧国の1つと聞いていました。確かに、車窓からの見える首都ダッカの様子は日本とは全く異なっていました。建物はコンクリートの色がそのまま残った状態で使われ、特に、街には老若男女関係なく物乞いをしている様子が衝撃的でした。車が止まれば窓をたたき物乞いをする。市場で買い物をしていれば、小さな子供が、帰るまでずっとついてきて物乞いをする。それを横目で見ながら何もできない自分が本当に辛い気持ちでした。以前中国に行ったときも同じ体験をしてまた何もできなかったのが本当に辛かったです。しかし、そんな子供の目は違っていました。貧しさを全く感じられずに、瞳は清んで輝いていました。スラム街に建てられた小学校の生徒たちの目は、好奇心に満ち、勉強できることに対して心から喜んで授業に参加していました。日本では、学校に行くことは当たり前、また子供たちにとっては苦痛と感じていることと比べてみて、精神的に日本の子供たちより恵まれているなあと感じました。また、子供たちだけでなく、先生たちも同じでした。日本の学校の中には、授業をすることを苦痛と感じている先生も少なくないです。しかし、BDPの先生がたは、教えることに喜び、誇りを持ち、さらに自信をもって授業をしている様子を見て僕自身、本当に勇気づけられ、心に何かピリッと来るものを感じました。

また、このツアーで「人」との出会いが大きなものでした。BDPのスタッフの方々の本当に暖かい「人の心」。参加者1人1人に心を配り、何の問題なく、しかも充実した時間を提供してくれたことに、感謝してもしきれないくらいです。ジャマルプールでは、オフィスに毎日遊びにくる子供たちとの出会い。見ず知らずの者が自分たちの村にやっても、怖がらずに遊びにやってくる毎日。言葉は全く通じないのに、交流を持とうとする。幼さ、親しさを感じ、僕の心の中にスーッと心地よい清んだ風を注いだ気分になりました。また、十数年ぶりにあんなに体を動かして、筋肉痛になったにもかかわらず、もっと動きたくなりました。さらに、一緒にジャマルプール行ったBチームのメンバー。毎日、よく食べ、よく遊び、笑いが絶えることなく本当に心にビートを感しました。特に今年のBチームは「Strongest Team」と呼ばれるくらい活発なチームでした。自分たちの気持ちを素直にそのまま出して、「人」に出会うという貴重な体験をしました。

この体験をそのまま単なる思い出として残さず、恵に満ちた大きな糧にしてこれからの道を歩んで行きたい、たとえ小さな自分でも喜んでもらえることは、自分でも嬉しいので、できることは積極的に実行していくという勇気を持っていきたいです。バングラデシュの、ジャマルプールの清んだ空のもとで暮らしている子供たちのように……。心の故郷を感じて……。



AI LOVES BANGLADESH!!! I LOVE BANGLADESH!

小林 あい

BEFORE

「バングラデシュ?!」聞いて驚かない人はいなかった。それもそのはず、バングラデシュのイメージと云ったら、貧しい、汚い、地雷……。生きて帰ってこられるのかが自分自身でも心配だったのだから。加えて、フライトが無事に終了するかも疑問だった。バングラデシュ航空?

DHAKA

そんなこんなで、無事にバングラデシュの地を踏むことになった私たちの目に飛び込んできたのは、想像を絶するバングラデシュの現状だった。人々は夜でも街にあふれ、車やリキシャが接触すれすれですれ違い、空気は排気ガスでよどんでいて息をするのも大変だった。マーケットへ繰り出せば、小さな子供に物乞いをされた。子供の笑顔がまぶしくて、なんでもしてあげたくなかったが、私にできることは同情だけだった。彼らがほしいのは同情なんかじゃないのに。笑顔が心にしみて痛かった。「こういう子に未来を与えるために BDP は活動している」といったアルバートさんの言葉が思いだされた。その日の帰り道、排気ガスの匂いに、この地に生きている人の『生』を強く感じた。みんな、懸命に生きているのだ。

JAMALPUR

ここでの日々は忘れられない。美しい自然と優しい人々に囲まれ、私たちは楽しい1週間を過ごすことができた。毎日が新鮮で、日本で見ていたものでも違うもののように見えた。みんなでおなかを抱えて笑い、料理の品が8品になってしまうほど食べ、歌い、踊り、泣いた。そんな私たちを支えてくれたショフイークさん、モクレスさん、ハビブさん、バセットさん、そしてヘモントさん、オシムさん、ドンノバット! みんな、ドンノバット!

AFTER

バングラデシュですごした2週間は私の人生の最も重要な部分を占めた。今まで、自分で勝手に作り上げていた価値観の壁が音をたてて崩れていった。私には何もできない、そう思った日もあった。しかし、私にもできることがある、私だからできることもあるのだ。

バングラデシュスタディーツアーの感想

東京女子大3年 雨谷 香

バングラデシュでの、短く、長い二週間のことを今でも鮮明に思い出すことができます。そしてその度にパワーをもらえる気がします！个性的でやさしいスタッフの方々や、毎日一緒に遊んだ元気いっぱいの子供たち、手で食べたおいしいカレー、活気のある町の人々や風景、農村で感じた雄大な自然など。始まるまでは、がんばってお金を貯め、ドキドキしながら申し込んで、未知の世界であるバングラデシュに対して夢（または心配）を膨らませていました。終わってみると心配するどころか、二週間という期間は、驚いたり、笑ったり、歌ったり、泣いたりしているうちにあっという間に過ぎてしまいました。しかし、毎日が本当に充実していて、頭も体も心もフル回転という感じでした。

バングラデシュの写真を親や友達に見せると、「日本にいるときと顔が違う！」とよく言われます。確かにそうかもしれません。私にとってバングラデシュで二週間過ごしたことは、私の中に何か今までとは違うものを作り出したように感じます。でもそれが何なのかは自分でもよく分からず、うまく言葉にすることができません。

私はこの二週間の間にたくさんのすてきな人たちと出会いました。それは今回一緒に二週間過ごしたメンバーや、BDPのスタッフの方や、船戸先生や儀子さん、子供たちやバングラデシュで陽気に生きている人々などですが。そのことによつて私は、人はみんなすばらしいし、人はみんな同じなのだ、ということにあらためて気が付きました。そして人はお互いに助け合って生きていかなければいけないと実感しました。そして私は、自分が得をすることを先に考えてしまいがちであることを恥ずかしく思い、たとえ自分の分が少なくなっても、みんなで分け合えばそれによつて幸せも共有できるということ、なんてすばらしいことだろう、と思いました。私は日本での忙しくて競争の多い生活の中で、つい忘れてしまっていたのでしょうか。もしかしてそれが私の中に生まれた何かと関係しているのかもしれませんが。

船戸先生が最後におっしゃっていたように、日本にいても、またどんな仕事についていても、シェアの精神というものは生かせると思います。私はこれから、いつもシェアの精神を持ち続けていくことで、心の中からバングラデシュが消えないようにしていくつもりです。心の中にバングラデシュがある限り、心が豊かでいられる気がするのです。

最後に、ACEFとBDPの方々本当に感謝します。皆さんが温かく見守ってくださったおかげで有意義な二週間を過ごすことができました。どうもありがとうございました。

バングラディッシュ紀行

私は、一年生の時から「バングラディッシュスタディーツアー」の張り紙を大学の掲示版を見ていて、「行きたいなあ」と思っていました。なぜバングラディッシュ惹かれたのかというと、単純ですが自分の知らない、未知の国だったからです。始めは、場所もよく知りませんでした。もう、二年生なので、いいチャンスだと思い、申し込むことにしました。

バングラディッシュに着いてから、まとわりつくような空気と、独特な匂いに私はドキドキ、ワクワクしました。日本の科学的な匂いではなく、自然の木や人、水の合わさった匂い。これは特にBチームが行った、ジャマルプールで感じました。ダッカは空気が汚かったですが、人々の熱気は驚きでした。

BDPの学校は、日本から比べるとかなり素朴で、環境は整っていないけれど、子供たちや先生の姿は、「勉強って楽しい」という気持ちが伝わってくるほど、熱心でした。一人一人の目は輝いていました。私が忘れていた、一生懸命さというものに気づかされました。子供たちと一緒に歌ったり、遊んだり、人との触れ合うことの大切、楽しさを素直に感じました。

BDPの学校教育のやり方に感銘を受けました。イスラム教では男女の違いがあったりしますが、BDPの学校では男女が一緒に並び、家庭科の授業は男女両方が行ないます。BDPのスタッフの人たちは、子供たちの未来のために本当に全力を尽くしています。そして自分の仕事に誇りを持っています。

バングラディッシュに来て、食事を分け合ったり、自分の考えを分け合い、楽しさ、悲しさ、時間を分け合い、「分け合う」ことのすばらしさをしました。私この気持ちを忘れたいです。

バングラディッシュは、日本よりも経済的には貧しいですが、人々の心は決して貧しくないです。「生きる」ことに精一杯で、よく働き、よく勉強し、よく考え、よく歌う人々です。私は彼らの温かい手を忘れません。

若井紗都子

バングラディッシュは力強くて美しい国だった。

最初にダッカにいた時は、360度から注がれる視線と物乞いの人にどう接して良いかわからず、戸惑っていた。でも初めて訪れたダッカのスラム街の寺小屋で、ぬかみにはまってしまった私のサンダルを拾ってくれた小さな女の子に出会った時心に優しくしみわたる様な温かさを感じた。そしてジャマルプールでの一週間を終えて戻って来た後のダッカは最初とは全く違って見えた。

ジャマルプールの全てはキラキラしていた。なんて美しい国なんだろうと何度も思った。どこまでも広がる空に浮かぶ雲は濃く、一面の草木はまぶしいほど緑色に輝いていた。夜空にはこぼれる様な星、ちらちらと舞う蛍。そして何より、いつも私達を出迎えてくれた子供達の生き生きした瞳と笑い声！名前を覚えようと何度も名前を聞いてくれたり、沢山の花をくれたり、恥かし気に歌ってくれたり、私達が歌うと一生懸命聞いてくれたり、チョビ（写真）の為におめかしして来てくれたり本当に私達の為に沢山のことをしてくれて、一つ一つが愛らしく、とても嬉しかった。毎日事務所の庭で皆で遊ぶのが最高に楽しかった。庭からの景色と井戸は私のお気に入り、美しい水や景色と、明るくて温かい皆に囲まれていると自分の心にも澄んだ光が広がる様だった。この豊かさに「他には何にも要らない」、と思えた。子供達が風車を地面にポイポイ捨てるので、オイオイと思ったが、よく考えたら枝や葉で出来たそれらは土にかえるのだ。儀子さんは使用済のテレカが教材にもトランプにもなる事を見せてくれた。日本の豊かさは大切なことを忘れていると思う。

BDPの活動もとても重要だと思った。地域と学校のつながりを大切にしている事、少数民族や識字率0%の村にも一早く学校を建てた事、寺小屋の先生に女性を起用することで女性の地位向上に努めている事等々。バングラディッシュの女の子は憧れてしまう程可愛いのに、彼女達にとって環境がいかに厳しいかを知ってとても考えさせられた。子供達にしても同じだと思う。

ツアーメンバーの皆やBDPのスタッフ、美味しい食事を作ってくれた方々や子供達や先生達、それに村の人達やリキシャワラーさんに物乞いの人達…本当に沢山人達の想いに触れることが出来て、私も多くの事を感じる事が出来た。いつも心から歓迎された事に何度も感激した。私も人との出会いを大切にする人間でありたい。沢山の幸せを与えられたことをとても感謝している。

大好きなみんなに、「ありがとう。」



Sutudy Tour に参加して 志岐 玲奈

Bangladesh へ行って、私はとても実りの多い時間を過ごした。
泣きもしたし、笑いもしたし、そして、沢山遊んで、沢山歌った。
日本にいたら絶対に過ごせなかった楽しい時間を、私は心で体験
した。

落ちやしないかと心配しながら、飛行機に乗った。全くもって運動
をしない機内で、おやつも入れて初めての機内食を三度も食べた。
乗り換えも初めてだった。全てが初めてではしゃいでいたが、ダッ
カに到着したとき、それは最高潮に達した。鬱陶しいくらいの湿気
を含んだ重たい空気、知らない匂い、そして、溢れ返りそうな人・
人・人！彼等の視線はとても痛くて、まるで、見世物になったよう
だった。でも振り返ってみると、私も同じようなものかと、異邦人
になってみて始めて、解ることもあった。

初めての海外。それが Bangladesh 。運命という物は必然的に
あるのだと、確信せずにはいられない。

食事は全て手。御手洗いには紙が無い。道端には塵の山。目に見
える排ガス。驚いて驚いて、新発見の無い日はなかった。そう思う。
思い出はまだ消えない。中でも、子供の表情は、死んでも忘れない。
屈託の無い、恥じらいを奥に隠した微笑み。美しい花々を、
私にくれた。小さな黒板を見つめるその眼差しは真剣其の物だっ
た。それを見たのは寺子屋であったり、農村での宿舎でのことだっ
た。

可愛らしい笑顔が、Bangla の子供たちにはよく似合う。でも私
がふと垣間見たのは、鋭い目付きで私を睨む少女だった。幼い子供
を抱え（弟か、妹だろう）窓越しに私を見つめる其の少女が、私に
何を伝えたかったのか。考えると、酷く胸が痛む。彼女はきっと、
私を、私たちを羨み憎んでいるのだ。

あんな表情を二度と浮かべてほしくない。所詮理想論だけれど
”全ての人が幸せに”
そう思って何が悪い。

人類みな平等。其のコトバの真偽
を、厭という程考えさせられた。
とても楽しい旅だったけれど、其
の思い以外のものも、私の心の中
には根付いてくれた。

此の旅の為に作ったパスポート
が切れぬうちに、私はもう一度、
Bangladesh へ戻ろうと思う。





মামার বাড়ি

জসীমউদ্দীন

আয় ছেলেরা, আয় মেয়েরা
 ফুল তুলিতে যাই,
 ফুলের মালা গলায় দিয়ে
 মামার বাড়ি যাই।
 ঝড়ের দিনে মামার দেশে
 আম কুড়াতে সুখ,
 পাকা জামের শাখায় উঠি
 রঙিন করি মুখ।

小学校1年生の国語の教科書に載っている「詩」を教えてもらいました。これは、大好きな叔父さんの家にみんなで遊びに行こう！という楽しい詩で、ベングル人は誰でも大好きな詩です。進級試験の時にこの詩を書く問題が必ず出るそうですが、歌にして覚えてしまえば簡単！と、ヘモントさんが即興で作曲しました。

জ্যোশিমউদ্দীন「মামল・বারি」

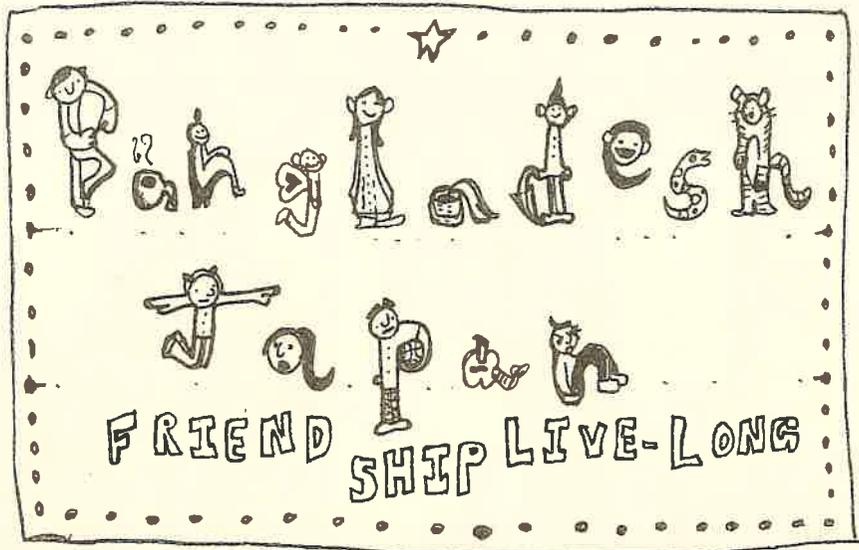
আই সেলেরা আই মেএলা ফুল তুৱরিটে জ্যাই
 ফুলেৱে মারা গৱাই ডিএ মামল বারি জ্যাই
 জ্যোৱেলে ডিনে মামল ডেশে আম কৱাটে শ্যুক
 পাকা জ্যামেৱে শ্যাকাই উটে রঙিনে কোৱি মুক

[Aチーム]



[Bチーム]





バングラデシュに寺子屋を贈ろう

教育はすべての協力の基です。会員としてご協力ください。

ACEF 

会員募集

個人会員	年額1口	5,000円
団体会員	年額1口	50,000円
学生会員	年額1口	2,000円
一時寄付	随時	金額自由

郵便振替 00100-0-185540
アジアキリスト教教育基金

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18-26

TEL. & FAX. 03-3208-1925

E-mail: acef@rg7.so-net.ne.jp

http://www.bluerain.fm/acef

アンボイラ小学校にて
初めての訪問でいろいろ戸惑いました



カティラ宿舎のすぐ近くで



ヨウコ タカコ トシユキ シスツカ



アヤコ カズコ ヒロミ ユイ

ダツカ飯。バナナとパイと卵



サリーを着せていただきました



in カティラ
危ない橋 渡り名人
『エキスパート洋子』
何げに写る
シャゴールさんが
美しい



オシムさん
にんじん1号

カティラ 最終日



にんじんもらって
トシユキさん(29)
食べる勇気が
ありませんでした...



in ダツカ

カルチャーショウの後で1本だけ。

フニバイル

最終日。
たのしいバンクラ生活をさせてくれた
スタッフと



この人を見て
食べた人
イロハさん
オシムさん
↑
オシムさん
食べかけ
にんじん

